

スポーツを取り巻く環境変化・国の動き等

【社会の変化】

- 急速な少子化・高齢化
- 若年層のスポーツ離れ
- デジタル技術の進展
- 気候変動、災害の激甚化

【国の動き】

- 改正スポーツ基本法施行（令和7年9月）
⇒スポーツに社会課題を解決するための役割を期待
- 第4期スポーツ基本計画の策定（令和9年4月予定）

<社会課題の解決>

- ・スポーツによる地域振興の推進、健康で活力に満ちた社会の実現、共生社会の実現、スポーツと文化芸術等他分野との連携

<ウェルビーイングの向上>

- ・一人一人が生きがいを持ち幸福を享受できるとともに、豊かさを実感できる社会の実現
- ・スポーツに親しむことができる機会の確保

<スポーツの役割>

- ・「する」「みる」「支える」に「集う」「つながる」追加

<基本施策の充実（主要）>

- ・発達段階に応じたスポーツの推進
- ・気候変動への対応についての留意
- ・デジタル技術の活用等（スポーツDX、eスポーツ）
- ・まちづくりと一体的なスポーツ施設の整備等

○国民スポーツ大会のあり方見直し

<3巡目国スポ在り方事前検討ワーキンググループ 検討結果>

- ・大会規模の見直し
- ・柔軟な大会会期の設定、各競技会の開催時期（分散開催検討）、施設の弾力的運用、特殊競技に関する近県・ブロック内の既存施設活用等

○中学校部活動の地域展開の推進

- ・将来にわたる生徒のスポーツ・文化芸術活動の機会の確保・充実等を図るため、国が定める令和8～13年度の改革実行期間中に、原則、全ての学校部活動において地域展開の実現を目指す。
⇒京都市では、令和10年8月末で中学校部活動を廃止し、新たな枠組み（「京クラ」、「放活」）を開始することを決定済み。

現行計画の進捗状況

（１）するスポーツ

<数値目標>「週1回以上運動やスポーツをする市民の割合」【R8】67.2% **達成**

- ・市民がスポーツ・レクリエーションを楽しむための機会充実に向けて、財源に限られる中で、民間資金等も活用しながら広くハード整備を実施。アーバンスポーツパークの開設など新たなニーズへの対応も進めた他、ソフト面の取組についても着実に実施。

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|
| ○施設の効果的・効率的な整備・運営 | ○年齢や個性・環境に応じてだれもがスポーツを楽しむ機会の提供 |
| ・長寿命化計画の策定及び同計画に基づく計画的な工事を実施 | ・ニュースポーツの普及・振興の取組の強化 |
| ・民間活力や市民からの寄付等を活用した施設改修を実施 | ・親子や多世代で楽しめるスポーツ機会の拡充 |
| ・宝が池公園運動施設内にアーバンスポーツパークを設置（R7） | ○WMG等の大規模国際スポーツ大会開催と連動した生涯スポーツの振興 |
| | ・WMG2027関西の実施に向けた推進体制の整備 |
| | ・「京都スポーツの殿堂」事業の推進 |

（２）みるスポーツ

<数値目標>「市内で直接スポーツを観戦した市民の割合」【R8】30.9% **未達成**

- ・市民がプロスポーツをはじめ様々なスポーツに身近に触れることができるよう、観戦環境の充実のための施設整備や各種競技大会等の継続開催・誘致に努めてきた。
- ・一方で、現行計画期間中に京都サンガF.C.が拠点を京都市外に移転させるなどプロチームの市外流出といった課題にも直面している。

- | | |
|--|--|
| ○競技環境と観戦環境の充実 | ○総合スポーツイベントなどの開催 |
| ・たけびしスタジアム京都の大型映像装置等の整備等 | ・女子駅伝、高校駅伝等の継続開催支援、ニトリJリーグ（ソフトボール）、ジャパンラグビーリーグワン公式試合の開催等 |
| ○競技スポーツへの支援とその魅力の活用 | |
| ・プロチームをはじめとする地域密着型スポーツチームと連携した地域活性化の推進 | |

（３）支えるスポーツ

<数値目標>「スポーツ活動にボランティアとして参加した市民の割合」【R8】5.9% **未達成**

- ・市民によるスポーツ活動を支え合う仕組みづくりの促進を掲げ、各種取組を推進。京都マラソンでは、毎年約7千人のボランティアが大会サポートに当たり、大会を支える存在として活躍しているが、その他の競技等への広がりは見られず、取組は道半ばの状況にある。

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------------|
| ○スポーツを支えるしくみづくり | ○スポーツを支える組織や団体等との連携・協働 |
| ・体育振興会70周年に合わせて今後の活動について活性化方策を取りまとめ | ・部活動地域展開の担い手となる地域スポーツを支える人材・団体の育成・支援 |
| ○だれもが利用しやすい施設の提供 | |

計画推進のための3つの重点戦略(スポーツインフラ、ウェブ、リエゾン)の取組状況

現行計画では、「する」「みる」「支える」で体系化した各施策に横ぐしを通すことを狙いとして、スポーツインフラ（ハード）、ウェブ（ソフト）、リエゾン（ヒューマン）の3つの重点戦略を設定して計画推進に当たっている。

「インフラ（施設整備）」は、限られた財源の中でも民間活力等も活用しながら、既存施設の改修はもとより新たなニーズへの対応を進めてきた。「ウェブ（情報発信）」では、ウェブサイト을立ち上げスポーツ情報の発信基盤の構築に取り組んだが、ユーザーのニーズを拾いきれておらず、今後も社会のデジタル化にも対応した訴求力のある情報発信の取組を展開していく必要がある。「リエゾン（人的・情報交流）」の取組に関しては、スポーツに係る多面的な交流の「プラットフォーム」のあり方を模索し、中学校部活動地域展開の検討WGとしての役割を担うこととなった。さらにスポーツを通じた社会課題の解決の期待が高まる中、一層の発展的取組が求められている。

市民アンケート総括

◆運動スポーツ実施状況

- ・週1回以上の実施率は67.2%で、R3年度調査（コロナ前63.4%、コロナ後58.1%）より増加し、回復・改善傾向
- ・「ウォーキング」「日常生活に組み入れた運動」が1・2位で、手軽・身近な運動が中心

◆運動スポーツに関する情報

- ・若年～中年層はSNS・WEB、高齢層は行政刊行物・テレビが中心で、年代に応じた情報発信の使い分けが必要

◆スポーツの観戦・応援の状況

- ・現地観戦は「しなかった」が6割超だが、R3コロナ後からの回復傾向がみられる

◆スポーツに関するボランティア活動

- ・スポーツボランティアは「しなかった」が9割超、今後の参加意向は「機会があれば」が最多だが積極層の拡大にはつながっていない

◆部活動の地域展開

- ・「言葉も仕組みも知らない」が約半数。制度の認知・理解は不十分

◆スポーツ施策など

- ・スポーツの価値では、「心身の健康づくり・体力向上」が86.6%と圧倒的。「競技の楽しさ」「観戦の感動」「人とのつながり」も半数超
- ・望む施策では、「身近な施設・設備の充実」が最多でR3年度より増加。「学校施設の開放」「高齢者支援」も増加傾向

団体アンケート・ヒアリング総括

◆京都市のスポーツ振興にあたっての現状、問題点・課題

- ・施設・設備の老朽化や不足、利用料金の割高感、稼働率が高く抽選予約の当選が難しい、学校利用の難しさ
- ・スポーツ人口の高齢化、減少
- ・スポーツを楽しむ機運の醸成、少人数・短時間スポーツのニーズ増
- ・インクルーシブスポーツの普及
- ・障害者スポーツの地域での受け皿不足

◆地域スポーツの担い手の現状、問題点・課題

- ・担い手・指導者の高齢化、不足、特定担い手への負担増の悪循環、地域の担い手の適切な役割分担が必要
- ・スポーツ人口減少による団体運営収入減、運営に苦慮
- ・部活動地域展開受け入れへの懸念・不安

◆多様な主体が連携した取組

- ・プロスポーツチーム、大学や地域、行政が連携したスポーツの取組の進展
- ・企業と地域スポーツの関わり、従業員の健康づくりの取組等が不足
- ・様々な世代や地域で広がりつつあるeスポーツ